

C—10 衣服圧に関する研究（第1報） ——ガードル類の圧力について——

東京学芸大 渡辺 ミチ
 ○中橋美智子
 田中 和子

1. 従来衣服圧が身体に悪影響を及ぼす例として、先ず婦人のコルセット・帯などが挙げられていた。今日では材料の進歩・形態・縫製の改良等により一般婦人の着用率も漸次多くなってきたが、しかし圧迫感の上からま

だ使用をためらう傾向も少なくないようである。

本研究は衣服圧の観点からガードル類について着用実験を試み、下着選択着装上の基礎資料を得ることが目的である。

2. 被検者女子学生5名に対しインサイドベルト・ガードルを着用し姿勢（立脚・椅坐・正坐）の変化により部位（腹部・側部・背部）に及ぼす影響について、詰寸法、サイズ別・製品別に胴囲・腰囲の箇所において動作による差その他について実験を試みた。測定項目は 1. 衣服圧（ストレンゲージによる）2. 皮膚温（サーミスタ温度計による）

インサイドベルトの衣服圧は、詰寸法・姿勢・測定部位・動作・呼吸状況何れも有意差が認められ、ガードルについては胴囲では製品・姿勢・サイズ・動作・呼吸状況・測定部位において、腰囲では製品・姿勢・サイズ・測定部位において有意差が認められた。

皮膚温の変化は認められなかった。

3. 以上の結果、インサイドベルトにおいては3cm以上の緊縛は明らかに有害とみられる。ガードルにおいては身体にあったサイズならば身体に無害であり、むしろ体型を整え腹部保温の上からは好ましいのではないかと考えられる。